池内敏著
『日本人の朝鮮観はいかにして形成されたか』

地理的に近い距離に置かれ、昔から密接な関係を結んできた日本と朝鮮との間には、平和・友好の記憶もある反面、侵略の戦火や併呑による支配・被支配の歴史も存在している。かかる関係に基づき、日朝両国の人々は相手に対する像――日本人の朝鮮観・朝鮮人の日本観――を描いていた。但し、それは認識上での変化による産物であり、相手の姿があるがままに投影されたものではない。そのため、日本人の朝鮮観は一定なものでなく、時代ごとの状況や地域などによって様々な姿をみせている。また、それは忘却と再生産を繰り返し、再生産された時点での環境が再び独特の意味づけを与えている。

本書は、日朝関係史における諸問題を綿密に検討してきた著者がこれまでの研究成果を組み立て、新しい内容を追加し、全一四章に再構成したものである。また、一六世紀末から二〇世紀初頭にかけての時期を対象とし、日本人の朝鮮観がどのように現れ、推移してきたかを叙述し、「その折々における発現形態の差異」に注目した点が特徴的といえる。

第一章から第三章は、近世日朝外交史の諸問題を取り扱う。第一章では、「日本国大君」号の創出過程を検討し、そこにみられる「対等外交」への意識を指摘する。第二章では、「武威」という民族的特徴を鍵とし、近世日本の自他認識に言及する。第三章では、一七世紀末に生じた竹島（鬱陵島）をめぐる日朝間の争論である「元禄竹島一件」を概観する。

第四章から第八章は、近世日朝交流の諸像を示す。第四・五章では、近世日朝間の漂流民相互無償送還制度を説明し、その中でも出身地を詐称した済州島民の様相から、地域独自の自我認識を導出する。第六・七章は、漂流と使行をめぐる「ひと」の交流と、交流の場に現れた絵画などの「モノ」を素材とする。第八章では、宝暦通信使の帰国途中に起こった「崔天宗殺害事件」の経過と、かかる日朝関係史上の「史実」が文芸作品の中でどのように脚色されたのかを提示する。

第九章から第一三章は、時期的背景が一九世紀以降に移る。第九・一〇章では、転換期の一九世紀に日朝両国の人々が鬱陵島をめぐって営んだ生業・交流の諸像を示し、続けて竹島の日本領編入過程を説明する。第一一章は、日韓併合の直前に行われた大韓帝国皇太子の鳥取訪問について論じている。

第一二・一三章では、朝鮮（人）に対する侮蔑観を止揚する雰囲気の中で現れた動きについて再考する。まず、「鮮人」をはじめとする「鮮」系用語は、植民地期における不条理な力関係によって蔑称と化したものであり、それは一九七〇年代における「現代的」な関心から「発見」され、止揚されたことを指摘する。続けて、細井肇訳『海游録』から細井の朝鮮蔑視観を読み取

ってきたこれまでの評価の誤りを批判する。

終章は、全章の内容をまとめながら、江戸時代には「鎖国」という枠組みによる制約が存在し、人々の間に存在した海外とのアクセスの程度における大きな格差が、近世日朝交流を特徴づけたことを指摘する。

本書の中で著者は、歴史学における史料読解と解釈の重要性を繰り返して強調する。史料読みにおいて恣意や先入観を排除し、「具体的な事実・史実との本格的な格闘」を遂行している本書は、歴史学が本来的に追求すべき道筋を読者に提示している。

（四六判　三三二頁　二〇一七年一〇月　講談社　税別二二〇〇円）

（李晧鎮　京都大学大学院文学研究科　博士後期課程）